Stendhal の人間像

金　子　　守

（序章）〈主題に就いて〉

Stendhal の人間像を修士論文に続いて研究のテーマとした動機は作品研究の目的とするばかりでなく，1962年頃から解明したいと思う主題があったからである。

それは Stendhal の性格形成の場に就いてである。すなわち，Jean-Jacques Rousseau の彼に対する〈influence〉と〈dégradation＝rétractation〉の問題である。

今日まで如何なる Stendhalien も Stendhal が少年期から青年期にかけて示した J.-J. Rousseau に対する傾倒を論証しながら1815年を境として Stendhal の著作から Rousseau の名が消失するのを不思議として示唆してきた。例えば，F. M. Albérès の言葉を読もう。

《……l'enthousiasme de Stendhal pour Rousseau et ses rétractations à son égard,……》〔1〕

此の示唆は Stendhaliens にその解答が疑問符のままにもかかわらず恰もそれが年譜の項目の如き印象を与えている。かかる重大な問題を素通りにして如何に優れた人間像を創造しようとも齟齬が姿を見せていることは一目瞭然であろう。そこで，私はこの疑問符に主題を設定したのであるが，小論を始めるに際して今日まで Stendhaliens が Stendhal を如何なる人間として把握してきたかを例証しておこう。Paul Arbelet はその著作『La Jeunesse de Stendhal』のなかで，

《A vrai dire la plupart de ses critiques ne s'en sont point aperçus, et quelques-uns s'obstinent encore à ne voir en lui qu'une âme sèche. Henri Beyle fut une âme tendre, éternellment dupe de son imagination et de son coeur…sa sensibilité est rare et exquise.》〔2〕

と，述べている。

上述の研究が出版されてから約40年後に，Stendhaliens にあっても碩学の Henri Martineau が『Le Coeur de Stendhal』という表題で Stendhal の人間像を透視し，その序文に次の如く見解を語っている。

《Celui que l'on a pris longtemps pour un coeur sec découvre un fond inapaisé de tendresse;……》〔3〕

このように，両者の Stendhal を観る態度は40年の距離を感じさせない。さらに Paul Arbelet は Chateaubriand と Stendhal がパリに上京し，彼等の性質のためにパリに幻滅と絶望を体験する姿を注目している。(注1)

しかしながら，此の両者が指摘しているように，Stendhal を乾びた魂とまでは極言していないとしても，かかる見地で彼の人間像を浮彫りにした Stendhaliens もいる。例えば次の引用文は1914年に出版された Léon Blum の『Stendhal et le Beylisme』からである。

1°: 《Entre ces deux tendances, le mécanisme à l'imitation d'Helvétius et l'individualisme romantique à la manière de Rousseau, la contradiction est cependant manifeste.》〔4〕

2°: 《Cette contradiction gîte toutefois au coeur même du Beylisme ; bien mieux elle en est l'essence, et, en la faisant apparaître, nous croyons toucher et désigner le secret même de Stendhal.》〔5〕

Léon Blum は Stendhal の性格が Idéologue 的な自我と Romantique な自我との可遡性にあると観ている。

此の Léon Blum と同様の視点から Stendhal を観た研究が，1956年に出版された F. M. Albérès の『Le Naturel chez Stendhal』にも読まれる。

《Aussi bien, l'enthousiasme de Stendhal pour Rousseau et ses rétractations à son égard, reflètent exactement les oscillations de la psychologie beyliste du naturel autour de deux pôles que nous avons étudiés jusqu'ici : le pôle du naturel idéologique et le pôle du naturel spontané.》〔6〕

Albérès のいう〈Naturel spontané〉の意味は注2として後述する。

Albérès のこの Stendhal 観は Léon Blum のそれとは弱冠の相異があるものの，その要処では同一の見解であると看做してよいであろう。つまり，両者は Stendhal の人間像に自家撞着を観ていることになる。

また，Albert Thibaudet はその『Stendhal』で Paul Arbelet や Henri Martineau に組する見解を示している。

《…autour de laquelle (Métilde) l'âme de Beyle connut toute sa capacité de rêverie tendre et de musique.》〔7〕

以上，Stendhal の研究者が彼の人間像を主題に研究した成果はかかる極端な結論を導びくにいたっている。そして，此の両極端の発酵の論拠を妥当なものとして承認できるであろうか，それともそれが単なる傍逕なり，隘路なりへの道標でしかないのか，結局，どちらの像を選ぶべきか，または二つの像を一つの像に彫刻しなおすべきか。これらの三つの方法しか残された道はない。選択性を内容としていることは何処かに研究者が見落している開けることの出来なかった錠前があるのではないのか，そこでその鍵を見出すのがこの小論の目的となる。

（第一章）〈Le sublime chez Stendhal〉

此の章は Stendhal が属していた家庭の環境から始めたいと思う。彼の家族関係に就いて，比較的 Stendhaliens が研究の場を深めなかった部分がある。その場とは Stendhal と彼の大伯母 Elisabeth との関係が，Stendhal の性格形成に如何なる影響を与えていたのか余り深く追求されていない。周知

のように Stendhal は父の Cherubin Beyle との不和からか家系図を語る際には，いつも母系を対象としていた。此の意味は注目すべきであって単なる伝記的興味に終ってはならない。要するに撰択がなされている。Stendhal が示した撰ぶことの意義は彼の性質が奈辺にあるかをわれわれに示唆しているとしなければならない。Stendhal は母系の Gagnon 家をイタリア人の後裔と信じて，イタリア的情熱の真髄が祖父 Gagnon よりも，彼の姉 Elisabeth に継承されていると観た。彼は大伯母の人間像を次の如く『Vie de Henry Brulard』のなかで誇らしげに描写している。

《…grande femme maigre, sèche, avec une belle figure italienne, caractère parfaitement noble, mais noble avec les raffinements et les scrupules de conscience espagnole.》〔8〕

此の Elisabeth の影響が少年 Henri Beyle の性格形成に執って果した役割は絶大であり，Stendhal 自身それを承認するに吝かではなかった。

《Ma tante Elisabeth avait l'âme espagnole. Son caractère était la quintessence de l'honneur. Elle me communiqua pleinement cette façon de sentir et de là une suite ridicule de sottises par délicatesse et par grandeur d'âme.》〔9〕

次に具体的な例を挙げて観ると，大伯母の口癖が Stendhal の記憶に残る。

《Ma tante Elisabeth disait encore communément quand elle admirait excessivement quelque chose:"Cela est beau comme le Cide".》〔10〕

そこで，Stendhal と大伯母 Elisabeth との関係から浮ぶ〈Image〉は〈Sublime〉の概念である。Corneille (1606～1684) の〈Le Cide〉(1636) にあって，Stendhal が〈Sublime〉と感じたことは多分以下の点であろう。Rodrigue は Chimène を，そして，Chimène は Rodrigue を愛するが，それは互に相手の魂の偉大さを尊敬しあい，相手を自己の生命を棒ぐべき最高度の善と考える。かかる両人に認められる魂の偉大さこそ，やがて Stendhal がいだく〈Sublime〉の泉となるであろう。Stendhal の言動にも，小説の主人公たち

にもこの〈Sublime〉の極限を眺めて人間の荘厳さに慄然とすることがある。

『Le Rouge et le Noir』の大団円で愛の裏切りゆえに Julien は Rênal 夫人にピストルを発射したが，此の不幸な恋人たちが愛の不滅を互に確認しあったのち，愛すらも超越した至高の姿を見せていると言えないであろうか。Julien の処刑の日，空は晴れていた。と，作家は描写し，そこにはもはや隼は飛翔していない。『La Chartreuse de Parme』に就いても Fabrice と Sanseverina 公爵夫人との親密さは夫人の愛人 Mosca 伯にさえ疑念を覚えさせるほどであった。しかし，その関係もあの瞬間に堪えさせる愛の超越があった。他方，狂人の如く疑惑に懊悩する Mosca 伯はこのような自己のあさましい姿を恥じる。彼等は相手の魂の偉大さを認めあい敬愛するからである。

作者 Stendhal 自身も魂の偉大な女性を求めて不幸な恋人の役割を生涯演じ続けた。女優にすぎなかった Mélanie に Mme Roland[注3] の役を望む。それも舞台ならぬ実生活で。Stendhal は『Vie de Henry Brulard』という表題で自叙伝を書いているが，主人公 Brulard の妻があの有名な Charlotte Corday[注4] であったと，臆することなく記している。

だが，なんと言っても，どの Stendhaliens も認めている如く，彼の魂の生涯の伴侶はあの Métilde であった。Henry Brulard はこういう。

《Métilde l'a emporté par les sentiments nobles, espagnols.》〔11〕

そして，1835年にすら，

《Métilde a occupé absolument ma vie de 1818 à 1824. Et je ne suis pas encore guéri, ai-je ajouté, après avoir rêvé à elle seule pendant un gros quart d'heure peut-être. M'aimait-elle?》〔12〕

と，告白している。

なお，此の Métilde の姿は Stendhal の小説に登場する作中人物のあらゆるヒロインにその面影をとどめていると言っても過言ではなく，主人公たちの諸行為の倫理は彼女との対話を母胎として生れてくる。かくで André le Breton も『Le Rouge et le Noir』を論じながら Métilde の作品への影響

を拡大する。

《Morte prématurément en 1825, elle lui deviendra plus chère même que de son vivant ; elle sera pour lui ((un fantôme tendre, profondément triste, et qui par son apparition le dispose aux idées bonnes, justes, indulgentes)). Sous un nom ou sous un autre, il l'évoquera dans la plupart de ses oeuvres, dans le livre De l'Amour, dans les Souvenir d'égoïsme, dans Leuwen, dans le Chartreuse de Parme ; et à cinquante ans, dans sa Vie de Henry Brulard, il jettera encore vers elle ce dernier cri, cette suprême et poignante interrogation : ((M'aimait-elle?))》〔13〕

今一つ〈Sublime〉の極を形成している観念がある。それは Julien や Fabrice が示す Napoléon にいだく憧憬である。Stendhal に執って Napoléon が〈Energie＝(passion)〉の権化であったことは何人も否定できまい。そして，Julien の態度は Napoléon が失墜して約15年を経た Stendhal の偽らざる真情の披瀝であろう。1799年，彼がパリに到着した11月10日は Napoléon が軍人独裁者として政権の獲得に成功した霧月18日の翌日であった。Napoléon のこの姿を少年の彼がどのように眺め考えていたかは不明である。Lucien の道を歩まなかった Stendhal が入学したのは Ecole polytechnique ならざる Daru 氏の家であった。此の偶然が彼を Napoléon が卒いるイタリア遠征軍に参加させることとなった。次いで翌年，マレンゴ戦が始まる。此の年，国内では王党派が西部を中心に活躍する。しかも政権を獲得した Brumaire 派にも Napoléon の軍事独裁に反対している一派がいる。それで反対派を沈黙させるためには Napoléon に執って名誉と戦勝が必須となる。Stendhal が的確に指摘しているように，ブルボン朝の如く支配者の伝統がない Napoléon には勝利の星数が彼の権力維持のバロメーターとなり，その失墜を防ぐことになる。

6月20日，マレンゴ戦の勝利をパリ市民は歓喜のうちに迎えた。しかし，Napaléon が Idéologue の人々をそう呼んだのであるが，形而上学者たちは

むしろ彼の勝利を悲しんでいた。例えば Mme de Staël 一派は彼が打倒されることを願った。と言うのは Napoléon の専制への道を阻止する唯一の手段であったからである。Mme de Staël が Napoléon に覚えた抵抗思想はやがて Stendhal のそれとなる。

Stendhal には Napoléon に就いて二つの著作がある。『Mémoires sur Napoléon』と『Vie de Napoléon』とである。後者は1817年から1818年，独立運動を排除せんとするオーストリアやイタリア支配階級の反動下にあるミラノで書かれ，Stendhal は八十七章で筆を折っているが，そのなかで，

《Un des malheurs de l'Europe, c'est que Napoléon ait été élevé dans un collège royal, c'est-à-dire, en un lieu où une éducation sophistiquée est communément donnée par des prêtres et toujours à cinquante ans en arrière du siècle》〔14〕

と，述べている。つまり，Napoléon が専制への道を登ったのは彼の偏向的な教養にあると，Stendhal は判断している。そして彼が Napoléon に訴ねたいことは，それは Napoléon が Montesquieu や Voltaire を読んだことがあるかということであったであろう。実は Abbé Renard の研究によると，Napoléon の読書リストには啓蒙思想家が認められるという。Voltaire, J.-J. Rousseau, Mably, Renard などである。此の事実を Steudhal は知らない。それに Napoléon はツーロン攻国戦の時期までは共和主義者と看做されていた。ともかく Stendhal は Napoléon が Montesquieu や Voltaire を読み啓蒙思想家の知識を身につけていたならば，皇帝になるなどという野心を抱かなかった筈であると非難しているのである。しかし，Stendhal の政治観を Idéologue に求めるならば，Napoléon の経済政策にその政治思想が実践されているのを彼は知ったであろう。その証拠に彼の Napoléon に関する第一の著作のなかから次の文を引用しておこう。

《Le peuple, que Napoléon a civilisé en le faisant propriétaire et en lui donnant la même croix qu'à un maréchal, le juge avec son coeur, et je

croirais assez que la postérité confirmera le jugement du peuple.…》〔15〕

このように，Stendhal は Napoléon が農民に土地を与え啓蒙化した点では彼を高く評価しているけれども，反面，彼は Napoléon が独裁への階級を登るにつれて，反 Napoléon の態度を示した。例えば机上のプランでしかなかったが，友人 Mante と共に Moreau 将軍の救出を企だてたりする。

しかしながらかかる非難と反抗を見せてはいるが Stendhal が Napoléon に覚えた敬愛は終生みられた。

彼の Napoléon への傾倒を考えると，その思想が単なる共和主義に留まらずその範疇を超越していると判断すべきであろう。

Helvétius はその『De l'Homme』でこの時代を見事に洞見している。

《Cette époque précède de peu celle de la décadence d'un empire. Cependant les arts et les sciences y fleurissent. Il est deux causes de cet effet, La première est la force des passions ; dans les premières moments de l'esclavage, les esprits encore vivifiés par le souvenir de leur liberté perdu, sont dans une agitation assez semblable à celle des eaux après la tourmente.》〔16〕

F. M. Albérès は『Le Naturel chez Stendhal』のなかで Helvétius の哲学を解説しながらその矛盾を追求している。

《Certes, un régime qui garanti la liberté de tous est souhaitable ; et cependant, d'après Helvétius, une certaine forme de despotisme est aussi susceptible, plus qu'un gouvernement républicain, de faire naître les grands talents, d'encourager, de favoriser les sciences et les arts. Sur ce point, nous retrouvons chez lui les contradictions que nous avons déjà signaliés.》〔17〕

此の Helvétius の矛盾は Stendhal の矛盾ともなった。Stendhal は1803年から1806年にかけて J.-J. Rousseau の研究を深めたが人民主権を認めていない。というのもその時期に彼は Montesquieu の『L'Esprit des lois』をも研究

していたが，むしろ，『Contrat Social』の方が気に入ったと述べている。しかし，ただ条件をつけている。それは Rousseau が60万のローマ人たちが投票しえたと言っている点は気に入らないとしている。かかる Stendhal の政治観からすると，彼は人民主権の政治の根本をなす普通選挙には反対であったと観られる。このように彼の政治観には Helvétius の影響が認められるが，此の意義は Helvétius の矛盾が彼の政治思想の限界を形成した点にある。Stendhal や Helvétius の政治観は君主制そのものを拒否したものではない。

Napoléon に対した Stendhal の政治理念は観念的には上述の理窟が通りそうだが，感情的にはそうではない。その様相は複雑な軌轢を画いている。Stendhal の如く未来の〈vision〉を所有している者にのみ諸々の飛躍が許るされるとするならば，彼は同時代のひとびとを超越した何かで自己の時代，社会をすでに歴史観で眺めうることすら可能であらう。すでに寛大さが観る目に加っている。ところで，先述したように Fabrice や Julien が Napoléon に覚えた純な情熱は単なる作家の夢想ではない。それはこの両者がともに小説の冒頭で登場して Napoléon に抱く憧憬であり，やがてこの純な情熱は主人公たちがそれぞれ女主人たちに抱く崇高な愛へと質的転換を遂げる。

Stendhal が Napoléon に示した態度は作曲家 Beethoven のエピソードを私に想起させる。Beethoven の友人の証言によると，彼が Napoléon に共和制を望み，人類の幸福を期待したところからある一つの英雄的な共和国を夢みていたがゆえに自己の作曲の『英雄交響曲』をBonaparte という傍名のもとに作曲を続けていたそうであるが，Napoléon の戴冠式があったことを知るや彼は怒り傍名を削除してしまった。と言う。けれども，後年，Beethoven は Napoléon にプロメティウスの役割を認めたといわれる。

ところで，Beethoven は Shahespeare や Plutarque を愛読したが，此の両者は Stendhal の読書リストにあっても上位にある。Beethoven の Napoléon に示したこのエピソードが意味する本質的態度は Stendhal に執っても同様である。

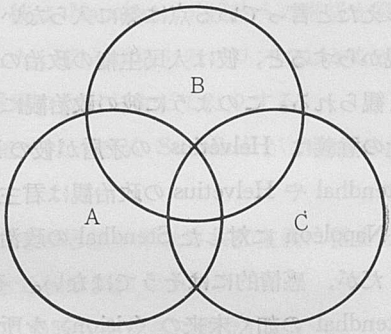
此の章では先づ〈Sublime〉の image を指摘したが，以後の研究を進めるに際して次の図式を示しておきたい。

A を〈Sublime〉の領域，

B を〈Sensibilité naturelle〉，

C を〈Sensibilité idéologique〉

の領域とするとき，私はこのBの領域にこそ Stendhal の自然の姿，静寧に安んじている姿であると思う。此の領域に何らかの動機が〈Passion〉を呼び，A，B，Cと，三重になったとき，〈Sublime〉の発露があると私は考えている。



ところで，Romain Rolland に Stendhal と音楽に就いてと題する小論文があるが，その論文で，Rolland は音楽によせて Stendhal の本性を見事に洞見している。

《Nous verrons, dans sa Lettre sur Mozart, comme il en a senti l'amoureuse mélancolie et la douceur profond. Pour parler son langage, Cimarosa a été son amante brûlante des années de jeunesse, et Mozart la compagne affectueuse de toute la vie.》〔18〕

それで，われわれは Stendhal 自身にこのことを語って貰おう。

《J'avouerai que je ne trouve parfaitement beaux que les chants de deux seuls autres : Cimarosa et Mozart, et l'on me pendrait plutôt que de me faire dire avec sincérité lequel je préfère à l'autre.》〔19〕

（第二章）〈Sensibilité naturelle〉

私の Stendhal 観は第一章で明瞭にしておいたが，あの三因子に於いてこの〈Sensibilité naturelle〉こそ最も強よく彼 Stendhal の性格を支配してい

ると考える。此の視点では私も先述 Paul Arbelet や Henri Martineau の Stendhal 観に薫染されている。

しかし，私はそれが彼の人間像の全てであると看做すが如き単細胞的見解に固執するのではない。他方，Léon Blum や F. M. Alférès はこの〈Sensibilité naturelle〉に〈Sensibilité idéologue〉が絡み葛藤し相剋しあうなかに彼の本性を求めているが，此の見解に就いては私は部分的同意に留まらざるを得ない。

さて，此の章を考えるとき，Stendhaliens が先づ着目するのは必ず Stendhal と J.-J. Rousseau の比較研究である。

では，Stendhal は何才で Rousseau を識ったのであろうか，彼の1833年2月15日の日記を見ると，J.-J. Rousseau との接触は前者が6才のときであった。

《J'adorais l'éloquence ; des l'âge de six ans, je crois, mon père m'avait inoculé son enthousiasme pour J.-J. Rousseau…》〔20〕

『Vie de Henry Brulard』のなかで Stendhal が回想しているところによると，彼は家族が禁じていた Rousseau の『Les Confessions』や『Nouvelle Héloïse』や『Emile』をグルノーブルやクレーで，かの Matilde のように盗読していた。殊に思春期に入った彼は何度も『Nouvelle Héloïse』を読み暗記してしまう程であった。やがて初恋の相手を私の〈Julie〉と呼ぶことになる。尤も Stendhal ばかりでなく当時の青年に共通な Sylphide として考えることができるかも知れない。友人 Mante に J.-J. Rousseau の感受性が欠けていると非難して，遂に友情を断絶した Stendhal が，1805年時，親しく交際していたもう一人の友に Louis Crozet がいる。Crozet は Stendhal の『L'Histoire de la Peinture en Italie』の完成を手伝っている。その年の前後から彼は Stendhal と頻繁に会い共同生活さえしている。以下の引用は1805年2月11日の日付で記された Crozet のものである。勿論，Stendhal も同感であったであろう。

《Je ne puis pas voir Mlle Mars sans voir à la fois la Julie de J.-J. Rousseau, la vierge de Raphaël, la Monime de Racine》〔21〕

では現実に彼は Julie を得ていたのであろうか。Mlle Kubly の次に彼が愛したのは Victorine であったが，彼女こそ Stendhal が私の Julie と呼んだ女性である。だから彼に執って Rousseau の Julie は Sylphide ではなく現存する女性だったのである。1802年イタリアから帰った彼は3月4日の夜，Mozart を弾く Victorine に会う。Stendhal が彼女を愛するようになったのは，彼が彼女の兄 Edouard と友であったからであろう。兄妹の父は有名な立憲議会議員の Joseph Mounier であり，Stendhal が Angéra に覚えた悲恋と，望郷の念にかられて帰ったとき，彼女の一家は亡命から帰ったばかりであった。だが，程なく Mounier 氏は知事に任命されたレンヌに赴むいた。その3月15日，Stendhal は雨降るモンマルトルの車寄せにたたずんで彼の Julie が去りゆくのを人知れず眺めていたという。その後，彼は友である彼女の兄が自分の気持を妹に伝えてくれることを願って熱心に Edouard 宛の手紙を書いた。幾通も送られた。がすべて Victorine を感動させはしなかった。そこで Stendhal はクレーの山々を逍遙し，風雨の晴れるのを草ぶき小屋で待ちながら，『Nouvelle Héloïse』を読みつつ，彼の Julie を想うのである。しかし，彼の願望は現実にはいっこう進展をみなかった。遂に堪えかねた彼は Edouard に胸の苦悩を訴える結果になった。Edouard はこの哀れな Saint-Preux の切望にもかかわらず妹を君に呉れないと断ってしまった。

1804年12月9日，Napoléon の戴冠式が近づいていた。Mounier 一家もパリに到着する。2年以上も会うことのなかった彼の Julie に再会する。Stendhal はその会見模様を日記に書きこんだ。《J'ai vu Héloïse…》と，始めているが，夢想し続けた Julie に会ったのにかかわらず，いたって月並の挨拶をかわしたにすぎなかった。

《…J'ai l'honneur de vous saluer, Mademoiselle.》La-dessus, elle m'a fait

une courte révérence et fuyait dans son appartement; j'ai ajouté: 《Edouard y est-il ?》 Elle m'a répondu, je crois : 《Il est là, Monsieur.》〔22〕

しかしながら，友人の誰かが Stendhal に彼女の容貌を訊ねたとき，彼は具体的に Victorine の顔形を答えることができなかった。そこにわれわれは chérubin を見るのであるが，同時に Stendhal の性格の一端もうかがい得よう。

このように Stendhal と Rousseau が論じられるときは，両者の女性に接する態度が問題とされる。Stendhal の次の日記は彼の気持を率直に表現しているのではなかろうか？

《J'aurais été sublime à ses pieds comme Rousseau à ceux de Mme d'Houdetot,…》〔23〕

Jean Prévost の研究を云々するまでもなく，即興作家 Stendhal は彼の小説の主人公にもその時代を意識させた作者と似た告白をさせている。

《Dès sa première enfance, il avait eu des moments d'exaltation. Alors il songeait avec délices qu'un jour il serait présenté aux jolies femmes de Paris, il saurait attirer leur attention par quelque action d'éclat. Pourquoi ne serait-il pas aimé de l'une d'elles, comme Bonaparte, pauvre encore, avait été aimé de la brillante Mme de Beauharnais ?》〔24〕

これは Julien の独白である。

Stendhal は Roussean の諸作品を愛読したばかりか，彼の祖父 Gagnon が敬愛する Voltaire を訪ねてフェルネーに巡礼したように，孫の彼は 1800 年イタリアへ行く途中，ジュネーヴにある Rousseau の生家を訪ねている。

さらに，両者には共通する音楽がある。われわれは小説家 Stendhal の出発が，音楽家の評伝研究『Vies de Haydn, Mozart et Métastase』(1815年) にあったことを知っている。それに，『Les Confessions』を読んでいた彼が音楽研究家としての Rousseau を知らぬ筈はなく，彼は『Vie de Rossini』の中で『村の占者』に作曲家としての J.-J. Rousseau を大いに認め賞讃して

いる。

Rousseauは古典主義が抑制していた自我を解放する前浪漫主義運動の流れにあって，歴史の中に意識を導入した。彼が蒔いた種子を Chateaubriand と Mme de Staël とが発芽させ，その苗を立派に開花させたのは Stendhal であったであろう。勿論，〈esthétique〉の上でも早くから『L'Art Poétique』の統制が乱れつつあった。Bouhours の『La manière de bien penser dans les ouvrages des esprits』は前者におくれること僅か10年余でしかない。彼の意図は Boileau の基本的立場を否定するものではなく，むしろ補足するにあった。しかし，結果的には前者の芸術の原理と看做した〈正確さの精神〉に対して感受性を根拠とする〈délicatesse の精神〉を対置させてしまっている。古典主義が不正確さの根源となした虚偽する後者には真理と並ぶものとなる。美には影も必要な条件となる。そして，此の新しい esthétique の継承者が Dubos であった。(注5) 彼によれば，美と感じるのは個人の内的経験から生ずる直接的印象なのであって，普遍性が入りうる領域ではないと，鏡の比喩を用いて主張する。Dubos の著作を Stendhal は中央学校時代に賞として受けている。Dubos 同様 Stendhal も鏡の比喩が得意であった。esthétique の面で Stendhal の Dubos の影響を窺つものであろう。

以上，浪漫主義の芸術，思想を背景として Stendhal と Rousseau に戻ってみよう。この両者の意識の確認態度は理性によるのではなく，感性による。両者の思考は分析的思惟にあるのではなく，直観的思惟，つまり，驚きに始まる内的観想なのである。

Jean Starobinski はその著作『Jean-Jacques Rousseau』でこう述べている。

《…de là naît une exquise sensibilité qui donne à ceux qui en sont doués des jouissances immédiates, inconnues aux coeurs que les mêmes contemplations n'ont point avivés.…》(注6)〔25〕

次に具体的に，Stendhal の思惟形式を見よう。彼，及び，小説の主人公が音

楽を聴いたり，歌ったり，あるいは，山なり，湖を眺望するとき，彼等は対象を観照するだけで満足しているのではない。その時，自己の実在に気ずくのみならず，内的感情がその実在にあって目覚めるのを悟る。先述せる Romain Rolland は，此の問題にも触れている。

《Et Mademoiselle de la Môle, rêvant à Julien qu'elle aime en dépit de sa volonté, s'enivre d'une mélodie italienne digne de Cimarosa…Et Stendhal note avec pénétration que la musique joue ici le rôle d'entremetteuse. Elle fait de cette fille orgueilleuse, dont la passion est surtout cérébrale, une amoureuse profond, tout livrée à Julien, comme l'était Madame de Rênal. ((Elle passe une partie de la nuit à répéter cette cantilène sur son piano)). Et c'est la nuit suivante qu'elle reçoit Julien dans son lit.》〔26〕

要するに Stendhal に執っても彼の作中人物に執っても外的事象は鏡なのであり，彼等が前に立つとき，そこに映るのは彼等のあるが儘の姿であるが此の関係が彼等の心で対象を媒介として外的感情から内的感情へと移行し，恰も電流がヒラメントを流れた瞬間光を放つ如く，映像がひとに語りかけたとき，彼等は感覚の発現に自己の本質を訊ねて直観する。此の直観こそ彼等が生の喜びを最も強烈に享受している瞬間なのである。感じつつ生きることの幸福感が，彼等の実在に於けるあらゆる意義なのである。かくして，Rousseau と Stendhal の生の意義は Descartes の〈Je pense, donc je suis.〉ではなくして，〈Je suis en sentant.〉に尽きると私は観る。Rousseau は『Les Confessions』で自己を分析してこう批評している。

《Je sentis avant de penser : c'est le sort commun de l'humanité. Je l'éprouvais plus qu'un autre…》〔27〕

《Je n'avois aucune idée des choses, que tous les sentiments m'etoient déjà connus. Je n'avois rien conçu, j'avois tout senti.》〔28〕

さらに，『Les Confessions』を読み進むと，同じような自己解剖の繰り返しを見出すが，註7として挙げておく。そして，Stendhal は明らかに『Les

Confessions』を念頭におきながら書いた自伝『Vie de Henry Brulard』で，Rousseau の上述の文章のまったく続行であるかの如き鎖覚を与える自己批評を試みている。

《Mon coeur bien plus avancé que mon esprit sentait vivement qu'elle les louait comme les kings louent aujourd'huit la religion, c'est-à-dire avec une seconde foi.》〔29〕

《Ce dernier détail est aujourd'hui. Je sentait alors sans trop distinguer les causes. La sagacité qui n'a jamais été mon fort me manquait tout à fait.》〔30〕

僅か数例でしかないが，明瞭に両者の思惟形式は酷似していると認めざるを得ない。すなわち，両者は対象を感性で把握する。Rousseau 自身が語っている如く，他者より直観が鋭く対象に働きかける。認識の第一段階である悟性が両者に執っては認識そのものとなる。両者はそれを〈感情〉と呼ぶが，それは判断力をもプラスされたものである。しかし，Rousseau は自己の思惟形式を自他ともに認める立場をとった。それに反して，Stendhal は前者の態度とは逆に Idéologue によって，自己の認識能力に普遍性を与えようと試みる。自己の理性を鍛錬して極力感受性を制御して対象を判断しようと努力する。結果から観ると，彼の意図はある程度の効果を挙げたものの―（私は日本フランス語フランス文学会で1960年に発表した〈『Racine et Shakespeare』にみられる Stendhal の文学観の変化について〉で，此の問題を指摘したが，その論文を副論文として今回は提出したいと思う。註として扱うには長すぎるからである。）―根本的には彼の本性である〈Sensibilité naturelle〉からは幾らか疎遠な範疇に属していた。何故ならば，Stendhal が期待した分析的思考は彼の天性の思惟形式ではない。第三，第四章で彼の当惑する姿を眺めるであろう。

（第三章）〈Sensibilité idéologique〉

直観的思考へと，Stendhalは思惟形式を転位させようと目論む。彼がこう意図したとき，中央学校時代の数学教授 Dupuy 氏の言葉が Stendhal に何を為すべきかを示唆している。

《Cet homme (Dupuy) si vide disait cependant une grande parole : ((Mon enfant, étudie la Logique de Condillac, c'est la base de tout.)) On ne dirait pas mieux aujourd'hui en remplaçant toutefois le nom de Condillac par celui de Tracy.》〔31〕

と，『Vie de Henry Brulard』に読まれる。

かかる態度を彼が躊躇しながらも示し始めたのは，1803年頃からであるが，此の頃は，また，彼が劇作研究に余念がなかった時期でもあった。そして，Stendhal は研究理論を idéologue に求めていた。そこで，一連の idéologue の研究が両面から始められることとなった。

Condillac は Stendhal と同郷の人ではあったが，Stendhal は彼のロボット説に興味を示しはしたものの，上記引用文に洞察される如く，Condillac の Sensualisme そのものは余り重視していない。彼が研究したのは Lancelin, Cabanis, de Tracy, Helvétius, Maine de Biran, Pinel などである。

Condillac の sensualisme は此等の哲学者によって修正がそれぞれ試みられたが，Maine de Biran に至って，Condillac の sensualisme は決定的に修正されたと，哲学史は語っている。

Condillac の sensualisme は認識が事実に基づかねばならないに始まる。つまり，一切の事実が還元される原始的事実があることを意味している。しかしながら，感覚をもって原始的事実とみる場合，単なる感覚のみでは認識は成立しない。この点にとりわけ de Tracy や，Maine de Biran の出発点があった。Stendhal が Condillac に感じた不満も同様の理由であろうと思

う。

先述したことだが，Stendhal が Idéologue を研究し始めた理由に二つの根拠が考えられた。第一は Rousseau 的感受性からの脱出であり，第二は1803年から1806年にかけて，Molière たらんと劇作に専心していた彼が Corneille, Racine, Molière, Shakespeare などの諸作の分析に，Idéologue の哲学を自己の理論として応用していた。殊に，Cabanis や Helvétius の諸観念に基づいて劇作理論の涵養に励んでいた。しかし，この当時の彼の Cabanis 観は誤っていたというよりも数学好きの若い Stendhal には de Tracy や Helvétius の明晰性が Cabanis の哲学を影としていることに気づいていなかった。彼は1805年1月24日の日記で，Cabanis の諸事実を陳述する方法は一般的で漠然としているので気に入らぬと書いている。

《Je vais au Panthéon, je lis le premier Discours de Cabanis sur les rapports du physique et du moral. La manière d'énoncer les faits me semble si général qu'elle est vague. Cet auteur ne me plait point.》〔32〕

それゆえ，主として此の章では，Stendhal がどのように Helvétius を研究していたかを観たいと思う。勿論，此の両者の詳述はいづれ新たな機会でなそうと思っている。唯，ここではその重要な部分のみ少し触れたいと思う。

われわれの Esprit（=la faculté même de penser）を〈sensibilité physique〉と〈mémoire〉から成立していると，Helvétius は定義しているが，此の定義は明らかに彼も de Tracy や Cabanis と同じく Condillac の sensualisme の継承者であることを示している。後年，Stendhal は彼に抱いた真情を披瀝して Helvétius は生涯の師であった。と，Henry Brulard をして告白させている。(注8)

では，Stendhal が私淑した Helvétius から学んだものは何んであったのか。Stendhaliens に執っては周知のことであろうが，前者が後者から得た諸観念にあって最も重要なのは〈passion〉であると思う。Helvétus が説明す

る〈passion〉を Stendhal がどのように把握していったのかをみよう。

Stendhal は『Pensées』の1803年1月9日の日附に《Les passions peuvent tout.》と記しているが，F. M. Albérès, 及び，Jules C. Alciatore の指摘によると，Helvétius の文章を殆んど丸写ししている。

Stendhal: 《Helvétius. 317 C'est aussi dans l'âge des passions, c'est-à-dire depuis vingt-cinq jusqu'à trente-cinq ou quarante, qu'on est capable des plus grands efforts, et de vertu et de génie.》〔33〕

Helvétius: 《Il paraît donc que l'activité de l'esprit dépend de l'activité des passions. C'est aussi dans l'âge des passions, c'est-à-dire depuis vingt-cinq jusqu'à trente-cinq et quarante ans, qu'on est capable des plus grands efforts et de vertu et de génie.》〔34〕

《Les passions peuvent tout.》という命題は飛躍が直観される。それを愛が知的にしない愚かな娘はいないと，Helvétius は説明している。

《Que de moyens ne lui fournit-elle pas tromper la vigilance de ses parents, pour voir et entretenir son amant? La plus sotte est alors la plus inventive.》〔35〕

上例と同じく Stendhal はこの文を幾らか変えつつノートに書き留める。

《Les passions peuvent tout. Qu'une fille de seize ans, élevée par ses parents, bourgeois d'une petite ville, est sotte ! Elle est amoureuse, que de génie!》〔36〕

Helvétius が〈passion〉を重視するのは精神の不平等の原因が，第一に教育の相異であり，第二にその由来は人の注意能力の不平等にある。さらに，教育の相異とか，人の注意能力の大小が知識の度合に関係する。そのためには注意を操り返して倦きない根気が肝要である。そして，人に根気を与えるものは〈passion〉である。と，看做しているからである。d'Holbach と同様，人間を環境の傀儡とみる Helvétius であってみれば，人間の先天的能力を認めないのも当然の帰結であろう。Stendhal は Helvétius のこの説明を

生活の規範としている。次の書簡は過去の自分の生活を Helvétius 流に解釈している。

《C'est l'envie de m'amuser ou la crainte de l'ennui qui m'ont fait aimer la lecture dès l'âge de douze ans. La maison était fort triste; je me mi à lire et je fus heureux: les passions sont le seul mobile des hommes; elles font tout le bien et tout le mal que nous voyons sur la terre.》〔37〕

Stendhal はこの手紙で告白している如く精神の真空状態・倦怠にかかることがあった。このような自己の精神状態の脱出を目指す彼には Helvétius が救い手となる。1804年5月に妹 Pauline に宛て〈passion〉の効能を説いている。

《Les hommes ont diverses ressources contre l'ennui : d'abord, il faut remuer le corps quand on est ennuyé, c'est là le moyen le plus sûr. Je montais donc souvent à cheval ; je cherche à me rendre témoin dans les duels, à me passionner enfin; avec les passions, on ne s'ennuie jamais; sans elles, on est stupide.》〔38〕

Helvétius と Stendhal との関係は彼の小説にあって，Claude Bernard と Zola に等しい。倦怠に悩む La Môle 侯は実子があるのにかかわらず，特定の時間だけ Julien に彼の父の資格であう。一方，Julien はつまらぬ決闘を求める。真の相手は倦怠であった筈である。さらに『Le Rouge et le Noir』の一節に，

《Du moment qu'elle eut décidé qu'elle aimait Julien, elle ne s'ennuya plus. Tous les jours elle se félicitait du parti qu'elle avait prit de se donner une grande passion.》〔39〕

それゆえ，Julien が Matilde の愛人となる条件もあった。F. M. Albérès は Stendhal が Helvétius から受けた影響を，

《Nous ne voulions pas dire par là que les femmes et les jeunes filles

de Stendhal soient absolument dépourvues d'esprit. Mais comment ne pas remarquer la transformation du caractère chez les héroïnes stendhaliennes, sous l'influence de la passion.》〔40〕

と，指摘して，Clélia と Sanseverina に注意を向けている。なる程信心深く内気な Clélia が要塞司令官の父が失却するのを承知で，愛ゆえに Fabrice の脱獄を手伝う。Sanseverina は Fabrice の命を救う為には，窮鼠猫を咯むの如く太公を暗殺し，二度目は王子に操を与えて彼の危機を救う。彼女たちのみならず，Stendhal の作中人物はその強弱は別として情熱に翻弄されないものはない。これ程，Stendhal が Helvétius から受けた影響は確かに強い。だが，思惟形式に関して言えば，Helvétius からの影響は Stendhal が自己に欠如していると自認する分析的思考の代弁者として Helvétius を de Tracy と共に考えているところに由来しているのであり，Stendhal の思惟形式とは反対の立場にある。彼は天才の瞬間を待っていたと『Vie de Henry Brulard』で告白しているが，彼のかかる期待する態度は，きっと，Helvétius の天才論を知ったであろう。此の事からも Stendhal は分析的思惟が才能の本質であると悟ったと思われる。Helvétius は天才を発明の能力と定義しながらも人間の自発的独創を認めていない。彼によると分析的結果の組合せと，その撰択のみが独創を作るというのである。

（第四章）〈Le Naturel chez Stendhal〉

Helvétius が人間の自発生を無視するところに彼の哲学理論の限界が生じている。此の限界に関して Ernst Cassirer は『Die Philosophie der Aufklarung』で次の如き見解を執っている。断定のきらいがあるにせよ，要点はその通りと考える。

《此の限界とは，それが人間意識の生き生きとした豊かな内容を根底から否認し去り，それを単なる仮面，単なる仮装とみなそうとする平板化の手続

に存する。》〔41〕

さらに，Ernst Cassirer はより具体的にこうもいう。

《人間のうちにある感覚的で利己的な衝動を制御し，抑圧すべき根元的な〈思いやりの感情〉があると信じたような場合は，必ず，Helvétius はこの種の〈仮説〉が人間の感情や，行為に関する単純な事実の前にはどれ程不正確なものであるかを示そうとした。》〔42〕

やがて，〈思いやりの感情〉を人生で経験した Stendhal には，Helvétius の此の平板化が余りにも無神経に思えてくる。そこで，彼は遂にその『De l'amour』で不満を洩すに至った。

《L'amour donne les sensations les plus fortes possibles; la preuve en est que dans ces moments d'inflammation, comme diraient les physiologistes, le coeur forme des alliances des sensations qui semblait si absurdes, aux philosophes Helvétius, Buffon et autres.》〔43〕

次の文も附加しておこう。

《Enfin, j'ai cru reconnaître qu'Helvétius, n'ayant jamais senti ces douces affections, était, d'après ses propres principes, incapable de les peindre.》〔44〕

このように Stendhal は，Helvétius が愛に就いて誤認していると，非難している。さらに，Helvétius は友情に就いても所詮利害の目的でしか成立しない。無償の友情はあり得ないと『De l'Esprit』の中で定義している。(注9)

此の定義にも Stendhal は不満を覚えたことであろう。Stendhal は彼の友人であった Prosper Mérimée や Colomb などにただ利害の目的だけで接していたのであろうか。

では，誰が心理的内容の豊かさを Idéologue にあって承認し研究していたのか。その多様さを見抜いていたのか。

Sensualisme の立場から追求すると，Stendhal が Helvétius に不満を覚えた理由は，後者が外的感覚を重んじたことにある。他方，内的感覚の存在を

主張したのは，Stendhal が1803年当時，曖昧さを嫌っていた医者でもあった Matérialiste の Cabanis であった。Helvétius の哲学に Stendhal が失望するとき，Cabanis はその存在理由のゆえにみなおされる。

《Je pense en 1803 à Sagan que nous étions trop sévères envers Cabanis. …》〔45〕

『Souvenir d'Egotisme』で Stendhal は Cabanis の『Rapports du Physique et du moral』は自分に執って Bible であったと追憶している。

《M. de Tracy avait été l'ami intime du célèbre Cabanis, le père du matérialisme, dont le livre : Rapports du physique et du moral, avait été ma bible à 16 ans.》〔46〕

Cabanis の哲学は今日でいう心理学である。彼の哲学によると認識は外的感覚からのみ生ずるのではなく，内的感覚からも生ずる。すなわち，無意識の行為を問題としているのである。Cabanis に執っては夢も研究テーマとなる。確かに Stendhal の作中人物には深層心理の行為が明らかに洞察される。『Le Rouge et le Noir』の問題の場面，Julien が教会で Mme Rênal にピストルを発射する瞬間まで正気に戻らなかった。La Môle 邸を出た Julien はどうして教会に辿り着いたのかを Stendhal はまったく描写していない。Julien の行為は無意識のなかでなされたのである。

〈le coup de pistolet〉の場に就いては私は修士論文で詳しく論じているのでそれを簡単に引用しておく。あれほど理性的であり，いつも厳しい反省の末にのみ行動を考える。それに，得心と確信がない限り実践にふみきることのなかった Julien が激怒の虜となり，抑え難い衝動にかられ犯罪を無意識におかすであろうと，作家はそのように Cabanis の観察を直観したのである。Henri Martineau は Dubos こそ Julien の如くに人間が抑制し続けた情熱の横溢を夢遊状態に於いて行動に現わすと主張した最初の人であると，注目している。私がさらに研究したところ André le Breton もその『Le Rouge et le Noir de Stendhal』で同じく Dubos の解釈に従っている。なお，

Le Breton は Emile Faguet の不審を引用している。

《Emile Faguet, arrivant au coup de théâtre final de Rouge et Noir, s'étonne et récrie: ((Dénouement bien bizarre, et, en vérité, un peu plus faux qu'il n'est permis… Tous les personnages perdent la tête… Julien, l'impeccable ambitieux, l'homme de sang froid effrayant et de volonté imperturbable, est le plus insensé de tous. Il n'a qu'à attendre. Quelque bizarre effet qu'ait produit sur M. de La Môle la lettre de Mme de Rênal, il faudra bien que M. de La Môle revienne an sang froid et se retrouve devant les nécessités de la situation. Julien n'a qu'à attendre. Il n'attend pas. Il court à Mme de Rênal et lui tire un coup de pistolet.))

Faguet a-t-il raison de se moquer ?》〔47〕

このように Stendhal から Cabanis の哲学を知るとき，Idéologue 研究を続ける Stendhal に執って Maine de Biran との出会は邂逅とは言えぬ必然のなりゆきであった。Biran も de Tracy, Cabanis と同じく，Condillac の Sensualisme に修正を意図することによって，自己の哲学を見出す。彼は日記『Journal intime』が示す如く極度に鋭敏な内的感覚を持っている人であった。彼は日記の一節に自己の本性を分析している。

《Je suis, par ma nature, doué de l'aperception interne, et j'ai, pour ce qui se fait au dedans de moi, ce tact rapide qu'ont les autres hommes pour les objets exterieurs…》〔48〕

此の一節を読んで観ても表現上の相異があるにせよ，彼の思惟形式が Rousseau, Stendhal のそれと似ていることが彷彿としてくるであろう。否，似ているどころか酷似していると言うべきであろう。此の告白が示唆しているように，Biran は Cabanis と共に外的感覚が認識となるのみならず，内的感覚も認識を担うことを説明している。F. M. Albérès はその『Le Naturel chez Stendhal』の中で，

《Les acquisitions stendhaliennes à la faveur de la lecture de Biran se

réduisent à ces deux concepts, celui de sensation, celui de perceptions. Mais entre ces deux termes se joue toute la vie de Beyle;…》〔49〕

と，Stendhal と Biran との関係を研究しているが，Stendhal 自身は Biran の哲学をどのように，研究し認識していたのであろうか。彼が Maine de Biran を熱心に研究していた1805年当時，〈思いやりの感情〉を経験していた。その相手は Mélanie Guilbert である。日記でままならぬ気持を吐露している。

《Je n'ai point à d'esprit, j'étais trop trouble ; en revanche en sortant, il m'est venu une prodigieuse quantité de choses tendres et spirituelles. Quand je serai davantage perception et moins sensation, je pourrai les lui dire.》〔50〕

此の告白に読まれる〈perception〉と〈sensation〉とを F. M. Albérès は上述の彼の研究で捉えたのであろう。此の記述の内容は Stendhal が Maine de Biran を意識していることが予想されるが続文でそれを明白にしている。

《En lisant Biran qui m'explique les mystères des passions sentis en moi.》〔51〕

さらに Stendhal はこう続けている。

《Il me semble que je ne connais le bonheur habituel que depuis la lecture de Biran. J'ai passé ce soir 15 une soirée délicieuse avec ce qui m'aurait donné le spleen il y a quinze jours… Je pense à Méranie, et ce souvenir m'a charmé comme le plaisir lui-même.》〔52〕

毎日，数時間に及ぶ Maine de Biran の読書は一ケ月がすぎたとき，その哲学を Stendhal は把握するに至る。事実，此の年代から10余年がすぎた1820年頃の日記に読まれる哲学者の名は Maine de Biran のみとなる。

〈M'exercer à me rappeler mes sentiments naturels, voilà l'étude qui peut me donner le talent de Shakespeare. On se voit aller en jouant, on a la perception. Cette sensation est facilement reproduite par l'organe de

mémoire ; mais pour se rappeler les sentiments, il faut commencer par faire la perception.

Voilà où l'étude de l'Idéologie (Tracy et Biran) m'est utile.

J'ai été très naturel hier dimanche pendant quatre heures que j'ai passées avec elle; je n'ai pas encore fait perception, de manière que je ne sais pas encore ce que je lui ai paru. Pour être entièrement dans le genre naturel qui est le véritablement esprit, il faut y être habitué.…》〔53〕

此の文章を読んで観ると，Stendhal が Biran が説く習慣や努力の観念を充分に理解していることが分る。見られる通りこの彼の日記にには〈Sentiments naturels〉とあるが，此の言葉こそ，私が Stendhal の本性として〈Sensibilité naturelle〉と呼んだものの発現と考えるものである。

（第五章）　〈結　　論〉

此のように，Stendhal が自己の感受性に素直であるとき，Cabanis や Maine de Biran との関係には全く対立点がない。換言すれば Helvétiusが誤認したと Stendhal が非難した〈Amour inconnu〉も，Biran にあっては説明される。以上彼の Idéologue 研究航跡を注意深く考察して観ると，Stendhal の性格が本質的に〈Sensibilité naturelle〉にあることが洞察されるであろう。

故に，Léon Blum や F. M. Albérès が主張する Idéologue 的自我と，Romanesque な自我とが，矛盾の形象裏に，両者の相剋のなかに Stendhal の本性が存在すると看做すのは妥当な見解ではないと思う。彼が自己の本性である〈Sensibilité naturelle〉に何か無力感を覚える心理状態にあるとき，彼が自己の本性とは対象的なもの，自己の消極性に対する積極性，自己の無為に対する行動力，天才の瞬間を期待するよりも，不断の努力を志すときかかる彼の姿勢をその本性と見誤ってはならない。此の点に私の主張があるの

であるが，だからとて Paul Arbelet, Henri Martineau, Albert Thibaudet の Stendhal 観の如く，彼を情熱一辺倒の非合理的人間像と観たのではない。その理由は人間が生きた社会，殊に Stendhal が生きた社会は戦争と革命の真中にあった。そうした社会に物心ついたときから彼はいたのである。少年期には大革命と恐怖政治を，青年期に一士官にすぎぬ Napoléon が皇帝となるのを，そして，彼の失墜と王政復古を，続いて七月革命を眺めた。かかる動乱にあけくれた社会にあっては自己の本性を見失い易い。個人の性格はぎりぎりの線で妥協を発見する。人間疎外を意識したくないならば，自己救済の道は妥協以外にない。従って， Stendhal の妥協を彼の本性と見誤ってはならないし，完全に無視することも出来ない筈である。

（注１） 《Seul, je crois, pourait lui être comparé, pour la sensibilité malade, l'ardente timidité, et la sauvagerie, cet autre adolescent qui, douze ans plus tôt, était venu l'extrémité opposée de la France apporter à Paris, 《vaste désert d'homme,》 les même rêves secrets, pour y trouver bientôt les même désenchantements. Le vicomte René de Chateaubriand, alors en exil, eût sans doute méprisé cet obscur petit bourgeois. Pourtant leurs âmes se ressemblaient, à leur premier contract avec Paris, ville étrangère pour ce Dauphinois comme pour ce Breton ; …》〔54〕

実のところ Paul Arbelet の此の指摘は Stendhal が『Vie de Henry Brulard』の第37章で Chateaubriand には触れていないが，語っていることである。

（注２） F. M. Albérès がいう〈Naturel spontané〉の意味は次の通りである。

《Toutes les émotions amoureuses que Stendhal et Fabrice auraient pu oublir dans les salons, tous les rêves de générosité et d'indépendance que le contact avec la société auraient pu amortir se réveillent soudain au son de la musique de Cimarosa ou sur les bords du lac de Côme. Les sons et les lieux aimés rendent à Julien, à Fabrice et à Stendhal leur noblesse et leur indépendance naturelles,…》〔55〕

（注３） Mme Roland : La haine des Montagnards l'envoya à l'échafaud où elle monta en prononçant la phrase célèbre: 《O liberté! que de crimes on commet en ton nom.》(1754～1793)

（注４） Charlotte Corday, jeune fille, descendante du grand Corneille, née aux Champeau (Orne) en 1768 : elle poignarda Marat, dans un bain, pour venger, disait-elle, le mal qu'il avait fait aux Girondins, et fut exécutée le 17 juillet 1793.

（注５）Dubos の著書は『Réflexions critiques sur la poésie et la peinture』であり，別名，〈最初の感情主義美学〉と言われる。

（注６）此の文に於いて Jean Starobinski は〈jouissances〉の意味をこのように Rousseau 自身の言葉も引用して説明している。

《Ces jouissances, si nous en croyons la lettre sur le valais, sont celles où l'esprit du spectateur s'exalte jusqu'à s'oublir totalement dans son extase. 《On oublit tout, on s'oublit soi-même…》 Le moment de la plus parfaite netteté du paysage est aussi le moment où l'être sent s'effacer les limites de son existence personnelle. Le voile est supprimé, et le spectateur, devenu lui aussi moins opaque, disparaît dans la lumière à laquelle il est maintenant transparent.》〔56〕

（注７）《La cause de ces jugements tient trop à mon caractère pour n'avoir pas ici besoin d'explication;… On diroit que mon coeur et esprit n'appartiennent pas au même individu. Le sentiment, plus prompt que l'éclair, vient remplir mon âme; mais au lieu de m'éclairer, il me brûle et m'éblouit. Je sens tout et je ne vois rien. Je suis emporté, mais stupide; il faut que je sois de sang-froid pour penser. Ce qu'il y a d'étonnant est que j'ai cependant le tact assez sûr de la pénétration, de la finesse même, pourvu qu'on m'attende : je fais d'excellents impromptus à loisir.》〔57〕

此の文章の最后の句は，Stendhal や Lucien Leuwen の口癖とも言える文句に極端に類似していよう。

（注８）《Je n'avais pour appui que mon bon sens et ma croyance dans l'Esprit d'Helvétius.

Je dit croyance exprès, élevé sous une machine pneumatique, saisi d'ambition, à peine émancipé par mon envoi à l'École centrale, Helvétius ne pouvait être pour moi que prédiction des choses que j'allais rencontrer.》〔58〕

（注９）《Aimer, c'est avoir besoin. Nulle amitié sans besoin : ce seroit en effet sans cause. Les hommes n'ont pas tous les mêmes besoins: l'amitié est donc, entr'eux fondée sur des motifs différents. Les uns ont besoin de plaisir ou d'argent, les autres de crédit, ceux-ci de converser, ceux-là de confiner leurs peins; en conséquence, il est des amis de plaisir, d'argent, d'intrigue, d'esprit et de malheur. Rien de plus utile que de considérer l'amitié sous ce point de vue, et de s'en former des idées nettes.》〔59〕

引用文の原典，及び，その頁。

(1) F. M. Albérès: Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet p. 185.

(2) Paul Arbelet: La Jeunesse de Stendhal, Ed. Champion. I, Préface, p. 4.

(3) Henri Martineau : Le Cœur de Stendhal, Ed. Albin Michel. I, Avant-propos p. 10.

(4) Leon Blum : Stendhal et le Beylisme, Ed. Albin Michel. p. 135—136.

(5) Ibid. p. 137.

(6) F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet. p. 185.

(7) Albert Thibaudet : Stendhal, Ed. Hachette.

(8) Stendhal : Vie de Henry Brulard, Ed. Pléiade. p. 94.

(9) Ibid. p. 143.

(10) Ibid. p. 143.

(11) Ibid. p. 50.

(12) Ibid. p. 39.

(13) André le Breton : Le Rouge et le Noir de Stendhal, Ed. Melottée. p. 61.

(14) Stendhal : Vie de Napoléon, Ed. Champion, p. 5—6.

(15) Stendhal : Mémoires sur Napoléon, Ed. Champion. p. 7.

(16) Helvètius : Œuvres complètes, De l'homme. Ⅳ 47.

(17) F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet. p. 54.

(18) Stendhal : Vies de Haydon, de Mozart et de Mètastase, Ed. Champion Préface de Romain Rolland, p. 21.

(19) Stendhal : Vie de Henry Brulard, Ed. Pléiade, p. 362—363.

(20) Stendhal : Journal, Ed. Pléiade, P. 1529.

(21) Ibid. p. 1350.

(22) Ibid. p. 564.

(23) Ibid. p. 714.

(24) Stendhal : Le Rouge et le Noir, Ed. Pléiade. p. 239.

(25) Jean Starobinski : Jean-Jacques Rousseau, Ed. Plon, p. 100.

(26) Stendhal : Stendhal et La musique (de Romain Rolland), Ed. Champion, p. 18—91.

(27) J.-J. Rousseau : Les Confessions, Ed. Classiques Garnier, t. I. p. 12.

(28) Ibid. p. 13.

(29) Stendhal : Vie de Henry Brulard, Ed. Pléiade, p. 260.

(30) Ibid. p. 374.

(31) Ibid. p. 223—224.

(32) Stendhal : Journal, Ed. Pléiade, p. 608.

(33) Stendhal : Pensées, I. p. 54.
(34) Helvétius : De l'Esprit, p. 317.
(35) Helvétius : De l'homme, Ⅲ. p. 224.
(36) Stendhal : Pensées, 1. p. 62—63. 1er Janvier 1803.
(37) Stendhal : Corr., Ed. Le Divan, t. 1. p. 87—88, le 2 janvier 1803.
(38) Ibid. p. 182. lettre du mois de Mai 1804.
(39) Stendhal : Le Rouge et le Noir, Ed. Pléiade. p. 517.
(40) F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet. p. 37.
(41) Ernst Cassirer : Die philosophie der aufklärung : 啓蒙主義の哲学，中野好之訳．紀伊国屋書店，p. 30.
(42) Ibid. p. 31.
(43) Stendhal : De l'Amour, Ed. Le Divan I. p. 16.
(44) Stendhal : Corr., Ed. Le Divan, p. 161.
(45) Stendhal : Journal, Ed. Pléiade, p. 1270.
(46) Stendhal : Souvenirs d'Egotisme, Ed. Pléiade, p. 1459.
(47) André le Breton : Le Rouge et le Noir de Stendhal, Ed. Mellottée, p.270—271.
(48) Maine de Biran : Journal intime, 3 et 4 Novembre 1818.
(49) F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet, p. 145—146.
(50) Stendhal : Journal, Ed. Pléiade, p. 633.
(51) Ibid. p. 611.
(52) Ibid. p. 611.
(53) Ibid. p. 677.
(54) Paul Arbelet : La Jeunesse de Stendhal, Ed. Champion Ⅱ, p. 3.
(55) F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet, p. 184.
(56) Jean Starobinski : J.-J. Rousseau, Ed. Plon, p. 100.
(57) Jean-Jacques Rousseau : Les Confessions, Ed. Classiques Garnier, t. 1. p. 152—153.
(58) Stendhal : Vie de Henry Brulard, Ed. Pléiade, p. 351—352.
(59) Helvétius : De l'Esprit.

参 考 資 料

(1) Paul Arbelet : La Jeunesse de Stendhal, Ed. Champion.
(2) Henri Martineau : Le Cœur de Stendhal, Edition Albin Michel.
(3) Leon Blum : Stendhal et le Beylisme, Edition Albin Michel.

(4) F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal, Edition Nizet.
(5) Albert Thibaudet : Stendhal, Edition Hachette.
(6) André le Breton : Le Rouge et le Noir de Stendhal, Edition Mellottée.
(7) Helvétius : Œuvres complètes. De l'homme.
(8) Stendhal : Vies de Haydon, de Mozart et de Métastase, Edition Champion Préface de Romain Rolland.
(9) Jean Starobinski : Jean-Jacques Rousseau, Edition Plon.
(10) Jean-Jacques Rousseau : Les Confessions, Edition Classiques Garnier.
(11) Ernst Cassirer : Die philosophie der aufklärung.
(12) Maine de Biran : Journal intime.

≪Racine et Shakespeare≫ にみられる作者の文学観の変化に就いて

19世紀はじめ，Stendhal が，座右の書としていたのは，Jean-François de Laharpe の "Un Cours de Littérature" や Corneille, Racine, Molière などの古典劇と Condillac, Helvétius, Cavanis, de Tracy などの啓蒙論者たちのものであったのであるが，まず彼と Laharpe の知的交流を考察し，Stendhal の文学観の本質を明確にしておきたい。彼は Laharpe にまったく信頼しきった知的生活をすごし，妹 Pauline にパリから宛てた手紙には "Un cours de Littérature" に対する所見が述べられている。

《Je te conseille de prier le grand père de demander à Chalvet le Cours de Littérature de La Harpe qu'il doit avoir et le lire;…》〔1〕

続く書簡にも必らず Laharpe の講読研究を，妹に文字どおり強いたほどであった。

従って，さし当って問題となるのは Racine の研究が卓越していると言れている "Un Cours de Littérature" の esthétique である。Laharpe の esthétique を Pierre Martino の要約に借りる。

《Le beau est le même dans tous les temps parce que la nature et la raison ne sauraient changer.-Ce qui est beau dans Homère et dans Virgile

n'est pas beau parce qu'il l'ont fait, mais parce qu'il est conforme aux idées que nous avons de la nature des choses et des principes de l'art.》〔2〕

かように，Laharpe は美は絶対であると定義しているのであるが，此の芸術観は規則が美を創造すると考え，必然的結果として絶対美の存在を認容しそれは真実の一形式と考えられると断定し，具体的には，あらゆる詩人，劇作家の才能の条件は，韻文に於いて雄弁であることだと Laharpe はその esthétique を主張するわけである。数学を愛好した Stendhal に執って，諸観念の法則的研究が，Molière, Racine の如き戯曲を創作する道であると解く Laharpe の文学観を礼讃し，その esthétique を金科玉条と信じ韻文の上達を狙って劇作に励み，『Racine et Shakespeare』に於いてさえ次の如く語っている。

《Je veux que, dans trois cents ans, l'on me croie contemporain de Corneille et de Racine. C'est dans nos vieux auteurs que je trouverai le génie de la langue.》〔3〕

このように Laharpe の戯曲観が深く Stendhal のものとなり，Racine を重要視することになる。Pauline 宛の手紙にも Racine 礼讃となって表現されている。

《Je te conseille de lire Racine, le terrible Crébillon, et le charmant La Fontaine. Tu verras la distance immence qui sépare Racine de Crébillon et de la foule des imitateurs de ce dernier.》〔4〕

19世紀初頭を Napoléon の従軍兵士として戦争に参加し，その余暇をかかる古典研究にすごして古典派の文学観を身につけ，彼の世紀の Molière, Racine たらんとする意慾にかられ，実際，『Deux Hommes』，『Deux Amis』などの習作に日々を送っていた Stendhal であったが，1810年頃になると彼は自分には Racine 的才能がないことを認め，さらに2年後には自国の悲劇にもう感動しなくなり，自然，彼のそれまでの Racine 熱も衰微し，1807年，

すでに，《Je méprise sincèrement Racine.》と，妹 Pauline に打明けて，その見解を，

《Je vois d'ici toutes les platitudes qu'il faisait à la cour de Louis XIV. L'habitude de la cour rend incapable de sentir ce qui est véritablement grand.》〔5〕

と，示して，Racine 観の変貌を知らせていたのである。

私は，此の Racine 観の展開が，1823年の『Racine et Shakespeare』にいたって結晶していると断定せざるを得ない。因みにこの本の要旨をまとめると，Stendhal は19世紀という年代を思考の対象に於いて論じ始める。19世紀初頭は，Racine 劇が上演され宮廷に享楽と優雅のあった Louis XIV の時代ではなくして，むしろ，Shakespeare 劇が上演される直前のイギリス，すなわち，100年間の内乱と無数の謀叛や処刑，高潔な献身がすぎ去ったばかりの時代と類似しているから，フランスの歴史を紐解いてみても1780年から1823年の Stendhal の世代ほどに，急激な全的変化を自分たちの道徳や快楽に於いて体験したものはなかった。このようなひとびとに快楽を与える戯曲は Shakespearer 劇であり，おそらくフランスの新しい悲劇は Shakespeae のそれに酷似するかも知れぬ。と，Stendhal は結論しているのである。さらに本文より引用しておこう。

《Il contrarie un grand nombre de ces habitudes ridicules que la lecture assidue de Laharpe et des autres petits rhéteurs musqués du dix-huitième siècle nous a fait contracter. Ce qu'il y a de pis, c'est que nous mettons de la vanité à soutenir que ces mauvaises habitudes sont fondées dans la nature.》〔6〕

《Je ne vois de remède contre mauvais goût des écoliers que les pamphlets contre Laharpe et j'en fais.》〔7〕

要するに，美はあらゆる時代を通じて不変であるという Laharpe などによって培養された Stendhal の〈esthétique〉が，『Racine et Shakespeare』

では啓蒙論者の〈esthétique〉の立場をとり，美はその時代の忠実な反映であり，従って，相対的なものであると，まったく180度の変貌を文学観で遂げたわけである。しかし，彼の文学観が23年（『Racine et Shakespeare』の出版の年）に突然変貌したのではなく，1810年頃を境に7，8年にわたって，あのNapoléon 敍事詩の過中にあった Stendhal のヨーロッパ中を散索した経験と，Shakespeare，及び，啓蒙論者たちに対する再評価とが，彼の文学を観る態度を修正していったというべきであろう。

Stendhal の戯曲に関するノートでもある『Pensée–Filosofia Nova』の舞台に，Racine と，Shakespeare も頻繁に登場するが，その期間はおよそ1800年から1810年にかけてである。例えば，1804年7月25日に，

《Les personnages de Shakespeare ont peut–être un défaut qui est très brillant, mais qui n'est pas moins un défaut, ils sont trop éloquents. De cette éloquence poétique qui parle à l'âme en exerçant le moins possible la tête. Telle qu'il la fallait à un peuple grossier.》〔8〕

と，当時，Racine の飾りのない自然な Style に手本を求めていた Stendhal の Shakespeare を観る批評眼はいたって厳しかったのである。且つ『Pensées–Filosofia Nova』を読めば充分納得のいくことであるが，Stendhal は自分の批評の根拠を idéologue に証言させているのである。しかるに1807年から1810年頃を境に Stendhal の研究対象は Shakespeare 一辺倒となる。1810年の Pauline にあてた手紙で，彼は研究対象が不変であるということは幸福を創造する秘密の一つであると述べて，人名と作品を列挙しているのであるが，Johnson による『Lifes of poets』（彼のShakespeare に対する序文）も数えて，

《Et toujours Shakespeare, pour lequel ma passion ne croît pas, uniquement parce qu'elle ne peut plus croître.》〔9〕

と，述べている。

翌年の3月，友人 Louis Crozet との共同研究となってこの情熱は昇華し

ている。V. Del Litto の『La Vie intellectuelle de Stendhal』には，彼等の Shakespeare 観は讃辞に溢れていると実証されている。すなわち，彼等は次の如き註釈をしているというのである。最も偉大なドラマの天才，そして，彼等はその純粋性や真実性を高く評価し，さらに戯曲の構造が批判されていても，此の欠点は諸々の観念の大いなる展開，及び，感覚や文体の計り知れない変化によって償なわれる。と，弁護し，翌4月には1803年当時，その筋に欠点があると評した筈の『Macbeth』の研究に着手している。5分すぎると直ちに見物人は Macbeth 夫人が如何なる女性であるかを知ると，その性格描写を讃え，次の週には『The Merchant of Venice』，『Julius Caesar』，『The Merry wives of Windsor』にまで進んでいる。Molière が念頭にあった彼等からは Shakespeare の喜劇はそれほど評価されなかった。と，Del Litto はその見解を Stendhal に代って次の如く結論している。

《En un mot autant Shakespeare est supérieur à Racine, autant il reste au-dessous de Malière.》〔10〕

なお，こうした Racine, Shakespeare 観は，Stendhal が浪漫主義を知るに及んで益々そうした傾向を深めることになる。彼が浪漫主義を把握したのは，此の共同研究から2年がすぎた1813年であったろうと思われている。かの Schlegel の『Üver dramatiche Kunst und Literatur』は1813年12月始めにフランスで飜訳出版されている。Stendhal はこの本を14，15，16年と，毎年読み返したのである。此のことを『Racine et Shakespeare』で回想する。

《La lecture de Schlegel et de Denis m'a porté un mépris des critiques français, Laharpe, Geoffrog, Marmontel et un mépris de tous les critiques.》〔11〕

敗戦の祖国にブルボン朝の復活が眺められるのを嫌った彼の姿は Mosca 伯に似てミラノのスカラ座の桟敷に見られたが，桟敷の主はイタリアの Lamartine ともいうべき L. di Breme であった。Breme を取り巻く環境はコスモポリットな様相を呈し，イタリアのコペの観を呈していたのである。従

って，彼のサロン，及び，彼の桟敷にはヨーロッパ中の進歩的知識人が数えられた。Byron や Hobbes も例外ではなかった。両者は16年10月12日から11月3日までミラノに滞在していたことが知られているが，彼等がミラノに到着した頃，Stendhal はコモ湖を周遊していた。彼は16日にミラノに帰ったが，その当日，Breme の桟敷で Byron に紹介されている。

かかる知的環境ですごしていた Stendhal が友人 Crozet にあてた書簡はその文学観の変貌をいっそう明瞭に伝えている。Stendhal は幼な友だちに対して，イギリス文学の観念を示教したいと，《Note romantique》と，手紙の中に記しているが，Henri Martineau や，V. Del Litto の研究によると，それは1817年の『L'Histoire de la Peinture en Italie』の一部分となる筈であったが，実際は送られなかったという。且つ Martineau はそれがグルノーブル原稿の中の孤立した一葉がそうであろうと推定しているが，その原文を以下に引用すると，

《Je suis bien faché de ne pas avoir su ce que je sais aujourd'hui en faisant ma grande note sur les romantiques dans les tempéraments, je crois. Voici le fait: Les romantiques allemands ne sont que de lourds pédants. Le véritable genre romantique est celui qui est enseigné par l'Edinburgh Review et pratique par lord Byron et M. M. Southey, Campbell et Scotte.》〔12〕

さらに，Stendhal は Byron の『Corsaire』を讀えたあとで次の如き浪漫派に関する認識を記るしている。

《J'ai eu le plus grand tort de dire: les romantiques n'ont pour eux que le grand nom de Shakespeare. Byron et Scott iront certainement à la postérité et Byron est égal à Racine supérieur à Pope.》〔13〕

此の文章の続きを読むと Stendhal は Crozet のために，当時のイギリス浪漫派理論の集約といわれている Edinburgh Review の45号6頁を飜訳するつもりであった。と記して，彼がイギリス浪漫派を認識した感銘を Crozet

にもわかちたいと願ったのである。

翌17年の夏，すでに4年前にフランスで飜訳出版された Schlegel の『Über dramatiche Kunst und Literatur』がイタリアでも出版され，イタリア文学界にかなりの反響があったといわれ，浪漫主義に対する反撃も当然おこった。此の年イタリアの Auger ともいうべき Londonio の『浪漫派詩に関する批評』が，古典派を代表したかたちで出版されたが，此の年2ヶ月ほどしかミラノに滞在したにすぎない Stendhal ではあったが，ミラノ浪漫派対古典派の相剋にかたときも無関心ではありえなかったので，彼が Londonio の著作を知っていた形跡は歴然としている。論証してみると，『Racine et Shakespeare』に次の句が読まれる。

《Qu'est-ce que le romanticisme? dit M. Londonio.》〔14〕

Londonio の主張を V. Del Litto の解説に従って紹介すると伝統に忠実であった彼は自然を撰択すべきであって写すべきでにないし，彼に執って浪漫派劇は却って幻覚を破壊するように思えたのである。と，V. Del Litto は Londonio の主張を要約しているが，此の幻覚問題を Stendhal は『Racine et Shakespeare』で頻繁に取り扱っていることは枚挙にいとまないが，例えば，第一章に次の文が読まれる。

《Ces courts moments d'illusion parfaite se trouvent plus souvent dans les tragédies de Shakespeare que dans les tragédies de Racine.》〔15〕

かかる考察が証明するところからすれば，Stendhal の23年の文学観はミラノ滞在中のこの1817年頃の文学観に他ならないことが理解されるのである。それゆえ，此の17年の『L'Histoire de la Peinture en Italie』に23年の『Racine et Shakespeare』の結論がすでに次の文で示唆されているのも肯定されるであろう。

《Racine ne plût-il qu'à un seul homme, tout le reste de l'univers fût-il pour le peintre d'Othello,…》〔16〕

さて Stendhal が Racine, Laharpe に感銘を覚えなくなり，自己の文学

観で180度の変貌を遂げたと，私はこの小論での研究を提出したが，それを一言で纏めると，Stendhal が研究対象を Racine, Laharpe から Shakespeare, Edinburgh Review へと移行してゆく過程を年代的に追求して彼の文学観の変化を辿った。しかしながらときどき言及した如く，Stendhal と Condillac, Helvetius, de Tracy などの Idéologue との関係をも研究すべき問題なのである。というのも Stendhal の文学観の根抵には絶えず Idéologue が姿を見せていると断言しても良いであろう。あるときは de Tracy の場合の如く彼の交際相手として現れ，また，あるときは Cabanis の未亡人のサロンで Stendhal の姿が眺められたこともある。Pierre Martino は Champion 版のはしがきで上述のことを次の如く洞察し指摘している。

《C'est l'idéologie qui lui souffle ces pensées révolutionnaires. Evidemment il ne tire pas d'abord toutes les conséquences qui pouvait découler pour l'esthétique, de la lecture de Tracy et de Condillac. Sa théorie nouvelle de l'art, tout idéologique, ne se précisera qu'en 1817, dans l'Histoire de la peinture en Italie…》〔17〕

そこで，Stendhal がこの『Racine et Shakespeare』でどれほど Idéologue の学説の薫染を受けたかを確認したいと思う。彼に執って Idéologue とはグルノーブルの中央学校時代から親密であった筈であるが，此の関係に後年人間心理の研究や芸術作品の批評眼として，Stendhal が Idéologie を重く観るにいたって，両者の知的交流は益々深まる。すでに1802年の Pauline に宛た手紙には次の文が読まれる。

《Je t'enverrai aussi un petit liure de deux cent treize pages in-18, qui te donnera plus d'idées que toutes les bibliothèques du monde! C'est la logique de notre compatriote l'abbé de Condillac.》〔18〕

では Condillac が美に就いて如何なる定義を与えているのかを紹介したいと思う。彼の『Traité des sensations』の下巻第3章の3項にその解答があるので要約して観ると，善と美は絶対的ではないとし，具体的に導かれる一

つの帰結は善と美が絶対的ではないということである。判断する者の性格と，彼が組織立てられる仕方とに関係しているとしている。

このように，古典派や Laharpe の esthétique が美は絶対であると主張するのと対照的に，Idéologue は正反対の esthétique を展開するのである。さて，Stendhal の Idéologue の研究は Condillac から Helvétius, Cabanis, de Tracy に移り，彼は Helvétius からは慾望となって現わる情熱こそが人間に関する全ての領域に於いて，その行為の主なる動機であることを把握した筈であり，さらに，Cabanis からは人間は諸々の体質によって美や愛の感受性が相異することを示教された。Stendhal は1813年9月20日の日記で1803年頃 Cabanis に対して余りにも厳格な評価をしていたと反省して，次の如く記している。

《Cabanis ne prouve point qu'un homme à teint jaune ait nécessairement ce que nous appelons le caractère moral bilieux, il dit seulement qu'il l'a vu…》〔19〕

このように Stendhal は Condillac の esthétique の核心である美を判断するものの性格として，前述したように人間の研究に励みつつ文学作品の研究，戯曲の習作に余念がなかったのである。とりわけ，Stendhal が研究した一連の Idéologue にあって，『L'Histoire de la Peinture en Italie』の贈呈が縁となり知人となった de Tracy を研究し始めたのは，1804年の末だがここでその頃の彼の日記を引用して観ると，de Tracy に何を求めていたかが理解されるであろう。

《L'enthousiasme de vertu est si fort, et je sens si bien qu'on ne peut avoir de la vertu qu'en proportion de son esprit, et que, dans les ouvrages, la vertu des personnages est une grande partie, que malgré la neige, je vais chez Courcier, quai de la Volaille, acheter la première partie de Tracy, et que, sans feu, je viens d'en lire les soixante premières pages.》〔20〕

此の文章では人は自己の精神の割合でしか徳を持つことは不可能とあるが，実は，此の句は de Tracy の言葉とは思われない。多分，Helvétius の『De l'Homme』第2章の冒頭にある次の文章から Stendhal が記憶に留めていて記したのであろう。

《Si, dans chaque individu, les talents et les vertus sont l'effet de son organisation ou de l'instruction qu'on lui donne.》〔21〕

此の文章は，勿論，Idéologue の本領を発揮したものであり，周知の如く Idéologue は人智を啓蒙することで，利己主義の快楽を公利愛好にまで到達しうると看做すわけであるから，Stendhal の場合は人智と言わずに自己の精神の割合と言ったにすぎない。

Idéologue と Stendhal の関係は詳述すればきりがないが，枚数が制限されているので以上で終って，此の結論に移りたい。1803年頃から10数年にわたって Idéologue を研究し続け，その思考に慣れた Stendhal の文学観は，さらに1813年から1817年にかけてイタリア浪漫主義の洗礼を受けた結果，彼の『Racine et Shakespeare』に至って，Idéologue の文学理論を根幹とした Stendhal 独自の，といってもイタリア，及び，イギリスでみられる浪漫主義の色彩を帯びた浪漫主義文学観を形成するに至ったと観てよいであろう。

それゆえ，Stendhal が『Racine et Shakespeare』の第3章で，

《Le romanticisme est l'art de présenter aux peuples les œuvres littéraires qui dans l'état actuel de leurs habitudes et de leurs croyances, sont suceptibles de leur donner le plus de plaisir possibles.》〔22〕

と，彼が文学に志した初期の文学観をなしていた Laharpe の〈esthétique〉から全く訣別した定義をなしているのである。

〔後記〕 此の副論文は日本フランス文学会の機関紙である『フランス文学研究』の1961年号の43頁から49頁にある。

引用文の原典，及び，その頁

(1) Stendhal : Corr., I. Ed. Le Divan. p. 5.
(2) Stendhal : Racine et Shakespeare, Ed. Champion. Préface p. 8.
(3) Ibid. p. 12.
(4) Stendhal : Corr., I, Ed. Le Divan. p. 55.
(5) Stendhal : Corr., II, Ed. Le Divan. p. 259.
(6) Stendhal : Racine et Shakespeare. Ed. Champion. p. 22—23.
(7) Ibid, p. 106.
(8) En marge des manuscrits de Stendhal Compléments et fragments inédits. Ed. Presses universitaires de France. p. 127.
(9) Stendhal : Corr., III, Ed. Le Divan. p. 242.
(10) V. Del Litto : La Vie intellectuelle de Stendhal. Ed. Presses universitaires de France. p. 403.
(11) Stendhal : Racine et Shakespeare. Ed. Champion. p. 34.
(12) Stendhal : Corr., IV, Ed. Le Divan. p. 387.
(13) Ibid.
(14) Stendhal : Racine et Shakespeare. Ed. Champion. p. 19.
(15) Ibid.
(16) Stendhal : L'Histoire de la Peinture en Italie. Ed. Champion. p. 264.
(17) Stendhal : Racine et Shakespeare. Ed. Champion. p. 27.
(18) Stendhal : Corr., I. Ed. Le Divan. p. 68.
(19) Stendhal : Journal. Ed. Pléiade. p. 1278.
(20) Stendhal : Journal. I. Ed. Champion. p. 206.
(21) Œuvres d'Helvétius, tome III, De L'homme. p. 11.
(22) Stendhal : Racine et Shakespeare. Ed. Champion. p. 39.